

# 精神看護学臨地実習における看護学生の 学びに関する研究

— 学生の記述からみる学びの分析 —

呉大学看護学部

東中須恵子, 村木 士郎, 岡本 響子

**論文要旨** 臨地実習指導の基礎的資料にするため、精神看護学実習を終了した看護学生64名の実習後最終レポートを使って記述内容を分析した。更に、精神看護学実習目標である①精神保健医療における看護師の役割、②患者理解、③患者・看護師関係をカテゴリーとし内容分析の結果と照合した。64枚の実習記録から773文が抽出され、①精神保健医療における看護師の役割に関しては133文から43カテゴリー、3つのサブカテゴリーが、②患者理解においては、58文から10のサブカテゴリー、2つのカテゴリーが生成された。また、③患者・看護師関係では、469文から32サブカテゴリー、4つのカテゴリーが生成された。これらの結果から、学生は人間関係づくりに苦悩しながらも、援助に自己を媒体とする精神科看護の特徴や精神障がい者観を変化させていることがわかった。学生個々の体験を意味づけながら、学生の思考過程に沿った学習援助方法の工夫が示唆された。

**キーワード**：精神看護学、臨地実習、レポート、学び

## ■ 研究の背景と目的

これまで、精神看護学は看護教育の中で科目の位置づけが変化してきた。それまで成人看護学の一部として捉えられていたが、1990年に行われたカリキュラム改正において、専門基礎科目の中に精神保健が、基礎看護学の臨床看護学総論の一部として精神障害者の看護が置かれた。更に、1997年4月から、成人看護学の一部としての捉え方から独立し、教育内容が疾患を中心とした病気の看護から生活する人の看護へ移行した。

看護の原点は「人間関係づくり」「癒し」である。この原点に立てば、模索を繰り返しながら精神看護学が独立したことは、その専門性から看護学の大きな柱として期待されていることは明白である。

一方、精神看護学が独立したことでこれまで見学程度であった臨地実習（以下実習とする）も、多様な実習場所での体験を可能とし、看護と福祉を統合させた視点での教育が進められるようになった。

多様な実習場において看護教員（以下教員とする）や臨地実習指導者（以下指導者とする）は、看護学生（以下学生とする）の経験に意味づけしながら、様々な役割を取ることが求められている。その教育効果に関する研究も数多く行われるようになった。指導者や教員の実習指導（以下指導とする）に着目した研究では、学生の経験を重視した実習指導の検討に関する報告<sup>1-4)</sup>や、学生が指導をどのように受け止めているかの報告<sup>5,6)</sup>がある。また、学生の実習における学びを明らかにした報告<sup>7,8)</sup>があり、指導者としてのあり方や指導の内容の検討が、主に学生の実習終了後の実習記録やレポートを使って行われている。これらの研究報告から、学生のレディネスの違いや精神医療のニーズが異なることから、指導方法については模索状態にあることが推測される。また、実習方法についての報告は、経験型実習方法を取り入れて人と人との関わりが腑に落ちた実習になっている瀧澤<sup>9)</sup>の報告や学内授業に精神障がい者の体験談を取り入れ、実習前の精神障がい者観の形

成に影響を与えている池邊<sup>10)</sup>らの報告がある。

いずれにしても、これらの報告は精神看護学実習が患者と学生の相互作用で行われ、媒体はコミュニケーションが主であることから、看護学基礎教育の観点において人間関係づくりには有意義な体験学習の場所であり、教員や指導者が患者像を豊かに育てることの必要性を示唆するものである。

研究者の所属するA大学看護学部精神看護学は、精神科病棟での実習を主体としており、一部精神障がい者社会復帰施設の体験実習を導入している。

多くの学生は初めての治療環境と精神障がい者との接点に、驚きと不安を抱えながら「恐怖心」と「緊張」というメッセージを教員や指導者へ発信していることは否定できない。特に実習開始時、学生は患者とコミュニケーションをとろうとするものの、患者・精神障害に対する意識が自然と表出し、自分自身が安心できる場所を探し、実習初日からマイナスのスタートを切っているといえる。こうした緊張した体験を教員や指導者は、ポジティブに意味づけし有意義な体験へ修正していく指導を実践している。

今回、こうした教員や指導者の指導の実践が学生の学修にどのように反映しているのか検討することにした。学生の学修の結果を明らかにすることで、現在行っている指導を客観的に振り返ると共に、学生にとって効果的な指導方法の示唆が得られると考える。

## ■ 研究方法

### 1. 研究期間

平成20年4月～平成20年7月

### 2. 研究対象

A大学看護学部4年生前期でK病院で精神看護学実習を終了した64名。

### 3. データ収集方法

- 1) データ収集：援助した実施・実習後の自己評価や最終カンファレンスで指導されたこと、実習後の感想や考察などを自由に記述した最終レポート。

### 4. 分析方法

- 1) 実習記録から感想・考察・気づきが記述され

ている、意味がわかる最小限の文を抽出した。次に、記述内容により同類のものをグループ化しサブカテゴリーとした。更にサブカテゴリーの類似性に沿ってカテゴリー化して名称をつけた。信頼性・妥当性を確保するために、文章の抽出とカテゴリー化は、精神看護学実習担当者3名で行った。

- 2) A大学看護学部精神看護学（以下A大学とする）実習目標①精神保健医療における看護師の役割、②患者理解、③患者・看護師関係をカテゴリーとし1)で得られた結果と照合した。

## 5. 倫理的配慮

本研究の目的、参加は自由であり参加しなくても不利益がないこと、結果は研究のみに使用し、その結果は、個人が特定されないように公表予定であることを文書と口頭で説明した。また、実習後の学びのレポートであるために、所属機関や学年が特定されるリスクがあることを説明し、同意を得た。

## ■ 結果

学生64名、64枚の実習記録から773文が抽出された。以下、実習目的と照合した結果を中心に結果を述べる。【 】内はカテゴリーを、〈 〉内はサブカテゴリーを表す。

### 1. 精神保健医療における看護師の役割

精神保健医療における看護師の役割には、抽出された133文から43のサブカテゴリー、3つのカテゴリーが生成された。(表1)

最も生成数が多いカテゴリーは【対象への関わり方と援助に関する理解】で、〈健康的な部分に働きかける個別性を重視した看護の必要性について理解できた〉〈治療に参加しながらセルフケア援助の必要性について理解できた〉〈日常生活において看護師がモデルとなる〉の3つのサブカテゴリーで構成されていた。

次に生成数が多かったカテゴリーは【精神科病棟で行われる治療の理解】で、〈治療環境を整えることの重要性について理解できた〉〈行われている治療について概観できた〉〈患者の社会復帰とコメディカルについて理解ができた〉の3つのサブカテゴリーで構成されていた。

また、【精神科医療を取り巻く精神医療の歴史と患者処遇に関する理解】は、〈精神保健福祉法について意義が理解できた〉〈社会的入院につい

て考えさせられた〉〈患者の日常生活上での管理の難しさが理解できた〉の3つのサブカテゴリーで構成されていた。

表1 精神保健医療における看護師の役割

カテゴリー	サブカテゴリー	記述内容	記述数
対象への関わり方と援助に関する理解 (20)	健康的な部分に働きかける個別性を重視した看護の必要性の理解 (11)	<ul style="list-style-type: none"> <li>患者一人ひとり異なり、患者が納得できるよう対応することが大事。</li> <li>患者のセルフケアを正しく把握した上で必要な援助を提供する。</li> <li>患者の健康的な部分に着目して、患者自身がそれに気づくことが出来るように支持的な関わりが必要。</li> <li>同じ診断名でも性格や症状や健康の段階、治療の方法などが異なるので、関わり方や目標もそれぞれである。</li> <li>患者のペースに合わせて関わっていくことで相手の言葉を引き出せる。</li> </ul> <p style="text-align: right;">他</p>	4 5 2 1 1
	治療に参加しながらセルフケア援助の必要性について理解できた (7)	<ul style="list-style-type: none"> <li>小さなことでも「出来ましたね。すごいですね」と声かけをすることで笑顔が増え患者の自信につながる。</li> <li>患者の活動と一緒に参加しながら楽しい時間を共有する事が大切である。</li> <li>話を聴き、共感したり、笑ったりすることで、思いを表出することが出来、不安を安心に変えられるのではないだろうか。</li> </ul> <p style="text-align: right;">他</p>	2 1 2
	日常生活において看護師がモデルとなる (2)	<ul style="list-style-type: none"> <li>看護師のコミュニケーションの仕方を観察して、思ったより普通に会話していた。</li> </ul>	2
精神科病棟で行われている治療の理解 (16)	治療環境を整えることの重要性について理解できた (5)	<ul style="list-style-type: none"> <li>病棟を比較することで人権やプライバシーの配慮にも重点を置いた構造になっていると感じた。</li> <li>人権やプライバシーといった基本的な部分を考え直すきっかけとなった。</li> <li>精神障がいに対する考え方は、安全と人権の両立という考え方に变化した。</li> </ul> <p style="text-align: right;">他</p>	1 1 1
	行われている治療について概観できた (8)	<ul style="list-style-type: none"> <li>症状を抑えるための薬でも量を多く服用している人が多いため、副作用に対して十分な知識が大切である。</li> <li>病棟によって、患者一人ひとりがその人らしく生活を送ることが出来るよう、自己決定が尊重されている。</li> </ul> <p style="text-align: right;">他</p>	2 3
	患者の社会復帰とコメディカルについて理解できた (3)	<ul style="list-style-type: none"> <li>医療スタッフが連携して患者の自立を支えている。</li> <li>SSTでの看護師や他のスタッフの役割が理解できた。</li> </ul>	2 1

患者を取り巻く精神医療の歴史と患者処遇に関する理解 (7)	精神保健福祉法について意義が理解できた (3)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・精神保健福祉法の意義の理解。</li> <li>・治療環境の理解。</li> <li>・治療環境の実際を見て必要性が理解できた。</li> </ul>	1
	社会的入院について考えさせられた (2)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・社会的入院が多い。</li> </ul>	2
	患者の日常生活上での管理の難しさが理解できた (2)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・精神科病院の地域住民への働きかけの大切さについて理解できた。</li> <li>・鍵の管理の重要性が理解できた。</li> </ul>	1 1

## 2. 患者理解

患者理解には、抽出された58文から10のサブカテゴリー、2つのカテゴリーが生成された。(表2)

最も生成数が多かったのは【入院することについて考えた】ことで〈社会的入院の弊害について考えた〉〈過去のつらい体験が社会復帰の不安につながる〉の2つのサブカテゴリーで構成されていた。

また、【コミュニケーションの意義について理解できた】は、〈コミュニケーションを通して観察ができる〉〈日常的な会話が大切である〉の2つのサブカテゴリーで構成されていた。

## 3. 患者・看護師関係

患者・看護師関係には、抽出された469文から32のサブカテゴリー、4つのカテゴリーが生成された。(表3)

最も生成数が多かったのは【自己と自己の態度を振り返ることができた】で〈患者との信頼関係を繋ぐための方法〉〈患者への偏見を持っていたことへの振り返りと気づき〉〈相手に関心をもって接する〉の3つのサブカテゴリーで構成されていた。

次に生成数が多かったのは【相手の立場に立つ】で〈患者の表出する態度や発言の意味を考える〉

表2 患者理解

カテゴリー	サブカテゴリー	記述内容	記述数
入院することについて考えた (6)	社会的入院の弊害について考えた (4)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・長期入院生活が社会適応への不安に繋がる。</li> </ul>	4
	過去のつらい体験が社会復帰の不安につながる (2)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・過去のつらい体験が社会復帰への不安に繋がると考えた。</li> <li>・治療が長期間になる理由がわかった。</li> </ul>	1 1
コミュニケーションの意義について理解できた (4)	コミュニケーションを通して観察が出来る (2)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・日常会話を通して身体的観察の意義が理解できた。</li> </ul>	2
	日常的な会話が大切である (2)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・患者は敏感であり会話を患者のペースに合わせることの大切さが理解できた。</li> </ul>	2

〈先入観を持たず相手の思いを大切に〉〈沈黙も大切に感情に働きかける〉〈プロセスレコードを活用して態度を振り返る〉の4つのサブカテゴリーで構成されていた。

また、【コミュニケーションの大切さ】は〈非言語的コミュニケーションの大切さ〉〈自分の思いを正直に伝える〉の2つのサブカテゴリー、【指

導者から学んだこと】は〈印象に残った指導者の言葉〉の1つのサブカテゴリーで構成されていた。

学生は、人間関係づくりの苦手な患者と関係づくりに苦悩しながらも、受け持ち患者とのコミュニケーションを通して多くのことを学んでいる。特に、援助の実践に自己を媒体とする精神科看護

表3 患者・看護師関係

カテゴリー	サブカテゴリー	記述内容	記述数
自己と自己の態度を振り返ることができた (15)	患者との信頼関係を繋ぐための方法 (8)	・人間対人間として関わるのが大切と理解できた。	1
		・患者にとって安心できる距離を知ることは重要だ。	1
		・自己開示が大切であると理解できた。	1
		・誠心誠意関わっていくことの重要さが理解できた。	1
		・信頼関係が大切であるとわかった。	1
	他		
	患者への偏見を持っていたことへの振り返りと気づき (4)	・プロセスレコードによる自己の振り返りができた。	1
		・実習前に精神障がい者とのかかわりの不安があったことがわかった。	1
		・自分が変わると相手も変わることを実感した。	1
・自分のことをわかるということが重要であると知った。		1	
相手に関心をもって接する (3)	・接近の方法を考えるためにその時の患者の状況を知る。	1	
	・患者が存在していることから学ぶ。	1	
	・患者の思いを確かめる。	1	
相手の立場に立つ (12)	患者の表出する態度や発言の意味を考える (4)	・相手の発言の意味を考える。	2
		・患者の学生に対する配慮に気づく。	2
	先入観を持たずに相手の思いを大切に (4)	・患者の発言に対して先入観を持たない。	2
		・患者からの関わりを待つことも大切。	1
		・患者の病的体験に対して先入観を持って関わらない。	1
沈黙も大切に感情に働きかける (2)	・患者の感情に関心を向けて働きかけてみる。	1	
	・沈黙は患者のメッセージであると考えた。	1	
プロセスレコードを活用して態度を振り返る (2)	・プロセスレコードで患者の発言の意味について振り返る。	2	

コミュニケーションの大切さ (4)	非言語的コミュニケーションの大切さ (2)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・非言語的コミュニケーションの大切さが理解できた。</li> <li>・言語で表現することが難しいので場面を共有することを知った。</li> </ul>	1
	自分の思いを正直に伝える (2)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・受け止めたことを相手に返すことの大切さについて理解できた。</li> <li>・ストレートに自分の気持ちを伝えるかかわりも大切である。</li> </ul>	1
指導者から学んだこと (1)	印象に残った指導者の言葉 (1)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・患者へのかかわりの場面に居合わせた時の患者へ伝えた看護師の言葉に深い感動を覚えた。</li> </ul>	1

の特徴を捉え、様々な制限の中で患者の社会復帰するための努力が行われていることを理解している。また、これまでの精神障がい者の処遇を、自己のかかわりの評価や患者の置かれている日々の生活環境の中で振り返りながら、自己の障がい者観に関する変化も感じ取っていた。

## ■ 考 察

本研究は、学生の実習終了後のレポートの記述内容を分析し、更に、その結果を実習目標を尺度として用い学生の実習での学びを明らかにすることを目的としたものである。

A大学における精神看護学実習は、3年次の後期と4年次の前期に行われている。特に3年次の実習は、学生自身の学習準備や学習効果に影響を与えると考える。学生の実習における学習効果に影響を与える要因として、伊藤らは「臨床側での受け持ち患者、病棟の指導者と教員の指導力」<sup>11)</sup>を上げている。一方、神宝は「精神障がい者に対する偏見や否定的なイメージは実習学生にとって大きな課題である」<sup>12)</sup>と報告していることから、4年次に実習を行った学生のレポートを使用した。

このような背景を踏まえて、実習での学生の学びの特徴を分析し、指導者が果たすべき役割について考察する。

### 1. 全体の傾向から

結果の上位は、表3、表1、表2の順であった。学内学習で人間関係論、セルフケア理論を用いて学習を行っている成果が現れている。また、精神障がいされた人との関わりを自己を媒体として

経験することで、精神に障がいを持たない人へのメンタルヘルス・ケアを考えることが出来ている。こうした学生の学びが、経験だけに留まらず多方面において実践できるような指導の工夫が不可欠である。

## 2. 学生の学びの傾向から

### 1) 精神保健医療における看護師の役割

学生は、患者が病的体験を持ちながら生活していることを理解し、セルフケアに注目した看護師の役割を捉えていた。【対象への関わり方と援助に関する理解】で、〈健康的な部分に働きかける個別性を重視した看護の必要性の理解〉〈治療に参加しながらセルフケア援助の必要性について理解できた〉〈日常生活において看護師がモデルとなる〉は、サポートの必要性や医療提供システムの必要性と役割を考えることが出来ていた。A大学においては、実習3日目に1日患者社会復帰施設での体験実習を行っている。学生自らが患者の活動に参加しているが、治療に関わるコメディカルスタッフの役割や支援体制、チームの一員としての看護師の役割について捉えられたのではないかと考える。また、参加者と関わることで、自分がこれまで意識していなかった自分自身にある障害者観について意識し、自分を振り返ることが出来たのではないかと考える。安酸<sup>13)</sup>は、経験について「学習者自ら意味づけしていくという学習形態をとる実習」で「学生自らが経験の中に潜む認識のずれや矛盾を明らかにしていく」と概念化している。神宝<sup>14)</sup>は経験を重視した精神看護学実習の効果について、「学生の経験から始まる」と報告している。患者社会復帰施設での体験実習

は、学生が主体的に学びの場を選択できる学習機会が設定できているのではないかと考える。

## 2) 患者・看護師関係

学生は、よりよい人間関係をとおして患者との意思疎通を図ろうとしている。【相手の立場に立つ】〈患者の表出する態度や発言の意味を考える〉ことは、うまくいかない患者との関係の構築に苦慮したことが伺える。〈先入観を持たずに相手の思いを大切に〉という方法が見出せたのは、スムーズに行かない関係の原因について、患者の価値観や個別性を重視するという理論の実践ができたからではないかと考える。

ベナー<sup>15)</sup>は、看護学生という存在は、臨床技能習得モデルにおいては第一段階であり初心者であると述べている。学生が看護者として成長していくためには、看護の体験を体験で終わらせるのではなく、学生自身が咀嚼し自分自身に積み重ねていくことが大切である。そのためには、実習場で思うように行かない人との関係づくりの体験も学生にとって必要であると考えられる。

しかしながら一番重要であると考えられるのは、看護の初心者である学生が患者の体験にしっかりと向き合うことである。そのため、教員や指導者は看護の初心者としての学生に対話を通じた経験の振り返りや実習環境を整える役割を果たす必要がある。村島は、ある研修会において研修生が記述した実習での思い出の記述から「プラス感情」と「マイナス感情」を抽出しその結果を報告しているが、「マイナス感情」の中には、いつも患者のところにいないと居る場所がない、看護師の無関心や冷たい雰囲気、など居心地の悪い環境の記述が多くあったと書かれている<sup>16)</sup>。

学生が患者に関心を寄せるためには、実習環境による負担が少ないほうが向けやすくなる。実習病棟に安心した居場所があるということは、学修効果が期待できる一つの方法ではないかと考える。

## 3) 患者理解

A大学精神看護学においては、実習における看護の対象となる人を「精神に障がいのある、あらゆる発達段階の人とその家族」として捉えており、その人の生活に着目することを示している。患者との関わりは看護者としての自分自身を理解することに繋がっていた。藤野<sup>17)</sup>らは、看護学生の特徴として自分の伝えたいことを表現することが

下手であると報告している。また、田上<sup>18)</sup>は最近の学生の特徴を「自己表現が下手」「友人とも自分の内面的な問題を語ることが出来ず、表面的な過剰適応といえる関係を作っている」と報告している。

しかし、学生は患者との関わりをとおして【入院することについて考えた】ことから、患者の社会復帰を阻む理由について学生の立場で考えることが出来ている。患者の〈過去のつらい体験が社会復帰につながる〉と解釈しており、【コミュニケーションの意義について理解できた】のではないかと考える。学生は、患者のペースに自分を合わせることの大切さに気がついていて、患者を理解するだけでなく自己について知ることになることで、かなりつらい体験になっていることが考えられる。精神科に入院している患者の多くは、過去に対人関係で傷ついた体験を持っていることが多い。そのため、学生の体験はペプロウ<sup>19)</sup>のいう患者の体験と同一化し、このような結果が示されたと推測される。榎<sup>20)</sup>は「〈実習において学生-患者-教員はトライアングル〉であり、学生が患者と関係を築けないでいる場合その学生は教員とも関われないで居ることが多い」と報告している。教員や指導者は学生個々の体験を引き出し、学生それぞれの体験を共有する場面を多く持つ必要があると考える。

## ■ 本研究の限界

本研究の結果は、研究者の分析力によって学生の学びが十分に反映されているとはいいがたい。また、学生の学びが十分に反映されているとはいいがたい実習記録から導き出したものであることが本研究の限界である。

## ■ 終わりに

現在行われている実習方法で実習の目標がほぼ到達されていることがわかった。また、本研究により改めて実習指導に指導者と教員の連携が重要であることを知った。学生自身が自らの体験をとおして、客観的に自己を振り返ることが出来、患者との関わりを考えることが出来ていることにおいては実習の役割は大きい。知識と実践の統合を目的とする看護教育において、障害者観の学習支援として視覚的な教材を導入する重要性も示唆された。

## 引用文献

- 1) 武井麻子：実習指導のキーポイント. 看護教育46(11)：971-982, 2005
- 2) 武井麻子：実習の場で何が起きているか. 看護教育46(11)：983-990, 2005
- 3) 武井麻子：自分の体験を語ることーラブラリーフィング・グループとしてのカンファレンスー. 看護教育46(11)：991-996, 2005
- 4) 村島さい子：臨床実習指導者とともに取り組んだワークショップ. 看護教育46(11)：1021-1027, 2005
- 5) 永江春美：看護学生が受けとめた臨地実習指導者からのメッセージ. 第39回日本看護学会抄録集：155, 2008
- 6) 中野あずさほか：精神看護学実習の「患者ー学生」関係における困惑を改善するための指導方法の研究. 群馬県立県民健康科学大学紀要4(1)：51-62, 2006
- 7) 高橋香織ほか：精神看護学臨地実習終了後のレポート分析からみた学び. 岐阜県立看護大学紀要6(1)：27-33, 2005
- 8) 入澤友紀ほか：精神看護学実習における学生の「学び」の内容分析ー感想文における患者ー看護者の相互行為に参加しての「学び」ー. 群馬県立医療短期大学紀要10：71-78, 2003
- 9) 瀧澤直子：本学における精神看護学実習の歩みー精神看護学実習の経験型実習教育の確立に向けて. 東海大学医療技術短期大学総合看護研究施設論文集14：45-61, 2004
- 10) 池邊敏子ほか：精神障害者の体験談を取り入れた授業からの学び. 群馬県立看護大学紀要2(1)：104-110, 2002
- 11) 加藤伊千夫ほか：学生の実習記録からみえてきたことー. 学生の学びのプロセス・指導者の存在と役割ー看護教育43(7) 532-537, 2002
- 12) 神宝貴子：新人教師の実習教育経験1年間の軌跡ー精神保健看護学実習を担当してー. Quality Nursing 5(8)：45-50, 1999
- 13) 安酸史子：：経験型実習教育の考え方. Quality Nursing 5(8)：4-12, 1999
- 14) 神宝貴子：新人教師の実習教育経験1年間の軌跡ー精神保健看護学実習を担当してー. Quality Nursing 5(8)：45-50, 1999
- 15) Benner. P 著, 井部俊子訳：ベナー看護論ー達人ナースの卓越性とパワー, 東京：医学書院, 10-27, 1992
- 16) 村島さい子：実習教育における教師の役割と成長を支援するもの. 看護展望27(5)：23-29, 2002
- 17) 藤野ユリ子ほか：看護系大学4年生の学生生活や対人関係に関する認識と社会的スキル. 日本看護研究学会雑誌25(3)：175, 2002
- 18) 田上末千佳：N看護大学生の学生生活意欲についての内的体験ー半構成的面接を通してー. 日本赤十字看護大学紀要8：31-36, 1994
- 19) Peplau. H 著, 稲田八重子ほか訳：ペプロウー人間関係の看護論, 東京：医学書院, 31-38, 1973
- 20) 榊恵子：精神看護学教員の実習指導をめぐる体験ー教員が困惑する看護学生の特徴と学生のインタラクシオン. 日本精神保健看護学会誌17(1)：63-71, 2008